

## 2つの“立体”的視点から探る瓦当文様と製作技術の伝播

舘内魁生（東北大学埋蔵文化財調査室）

### はじめに

北部九州では韓半島・大陸と密接な交流が行われたが、それは何より両者の地理的な近さが背景にある。これに対して、東北地方は古代日本の周縁に位置し、韓半島・大陸からも相当遠い場所であった。そうした地理的環境にもかかわらず、東北地方には韓半島・大陸から来た人々の足跡が少なからず残されている。最も著名なのは、**貞観地震**（869 年）後に陸奥国府や国分寺の瓦製作に携わった新羅人たちであろう（工藤 1965）。これを裏付けるように、地震後の復興段階の瓦はそれまでの瓦当文様が一新され、平安京に類例のない**宝相華文軒丸瓦**が採用された。また、日本国内に類例がない棟平瓦も製作された（佐川 2018 ほか）。

さらに、東北地方全体を見た時、9 世紀代には少なからず外来の瓦当文様が導入されている。例えば、新羅系と言われる出羽国府の草花文軒平瓦や、顎面に精緻な型押し施文を施す**腰浜廃寺**（福島県福島市）の瓦群、在地の瓦と無関係に出現する**植松廃寺**（福島県南相馬市）の単弁四葉蓮華文軒丸瓦、宝相華文軒丸瓦と顎面型押し施文の瓦を有する**菜切谷廃寺**（宮城県加美町）などが挙げられる。

一方、9 世紀代には大宰府周辺に滞在していた新羅人の東国への移配記事が見られ（田中 2012）、一定数の新羅人が陸奥国内にいた可能性が高い。こうした文献史料から読み取れる動向と、東北地方に点在する「新羅系」瓦にはどのような関係があるのだろうか。

筆者はこうした観点から東北地方の平安期の瓦について検討を進めている（舘内・小川 2023）。進行中の研究のためまとまった成果はないものの、個別的な研究でいくつか興味深い結果が得られているので、これらを紹介したい。加えて、資料の様々な制約を乗り越えるため、伝統的な瓦研究とは異なる手法を用いたものもある。その用例を取り上げたい。

### 第1の視点 貞観地震と宝相華文軒丸瓦

前述したように、貞観地震の復興に新羅人が関わっていたことはよく知られている。とりわけ、復興後の多賀城や陸奥国分寺に大量に供給された宝相華文軒丸瓦は、新羅人が関与して生まれた文様と考えられている。

しかし、この時期の瓦の製作技術は基本的に在地に伝統的なものであり、瓦当文様や特殊な瓦を除くと、むしろ外来の要素は認めにくい。文献から新羅人の関与があったことが明確でありながら、新羅人たちは「本格的な瓦製造の技術はもたらさなかった」（工藤前掲、p10）とされる。近年も宝相華文軒丸瓦と新羅人の関与に疑問が呈されている（網 2023）。

また、宝相華文軒丸瓦を巡っては未解決の重要な問題がある。宝相華文軒丸瓦の最も古い段階と考えられるものは、**燕沢遺跡**（仙台市）にのみ供給され、多賀城や国分寺には一切供

給されていない。「復興瓦」であるはずの宝相華文軒丸瓦が、なぜ国府や国分寺に優先的に供給されなかったのであろうか。

こうした問題を解決するヒントになり得る瓦がある。それが**菜切谷廃寺**出土の軒丸瓦である。この資料はこれまで拓本やわずかな写真しか公表されていなかったこともあり、文様が崩れた宝相華文(内藤政恒瓦資料研究会 2013)とも、比較的精緻な宝相華文(佐川 2018)とも評価されてきた。実際、花卉中央に蕊表現があるなど祖型の燕沢タイプに近い特徴を持つが、花卉の形状はやや異なり、その評価は難しい。しかし、多賀城・国分寺以外では数少ない宝相華文軒丸瓦の事例であり、宝相華文の成立や展開を考える上で欠かすことができない資料である。ここでは、菜切谷タイプ、多賀城・国分寺タイプの宝相華文が、祖型である燕沢タイプからどのように伝わったか、その過程に注目したい。

筆者は当該資料の評価を進めるため、2次元的な瓦当文様の類似度だけでなく、立体物として文様を比べる必要があると考えた。よく言われるように、軒瓦には図案である「瓦様」があり、これは画工が作成したとも考えられている。その後、この図案をもとに仏師あるいは瓦職人が範を作成する。言うまでもないが、この図案→範は2次元→3次元という変換に他ならない。すなわち、文様の伝播を考える際、3次元情報の類似度を検討することで、図案による伝播なのか、人を介した伝播なのかといった点に言及できるものと期待される。

分析の詳細は発表で触れるが、花卉部分の断面を比べると(図 1)、燕沢タイプと菜切谷タイプは山なりの緩やかな盛り上がりで、蕊部分の形状も似ている。これに対して、多賀城・国分寺タイプは凹凸の境界が垂直に近く、立体感に欠ける。傾斜量図からも同様の指摘ができ、**菜切谷タイプの方が燕沢タイプの 3 次元情報を比較的よく再現できている**と評価できた。多賀城・国分寺タイプは宝相華文の2次元的な情報のみを頼りに、範を機械的に(凹凸のみの表現で)彫り込んだのではないだろうか。多賀城・国分寺タイプの製作に際して、燕沢タイプの図案のみが参照された可能性が高い。逆に、菜切谷タイプは燕沢タイプの製作に携わった製作者の関与や、範や瓦そのものが参照された可能性を考えたい。

以下ではより踏み込んだ考察を行いたい。実は、燕沢遺跡と菜切谷廃寺には共通点が多い。両遺跡とも多賀城以前の創建(7世紀末～8世紀初頭)と考えられ、燕沢遺跡は宮城郡附属の寺院、菜切谷廃寺は賀美郡あるいは城生柵の附属寺院などと考えられている(諸説あり)。興味深いことに、両寺院では上総系の四弁蓮華文軒丸瓦が共通して採用されており、早い段階から人的・技術的な交流があったものと考えられる。今回、菜切谷廃寺に祖型に近い宝相華文があったことが明確になったが、この宝相華文についても、宮城郡、そして菜切谷廃寺のある賀美郡の相互交流で拡散したと言えよう。さらに想像を逞しくすれば、宝相華文は当初は郡レベルの寺院で採用された文様であり、ある段階から「復興瓦」に採用されたのではないか。すなわち、宝相華文は当初から「復興瓦」ではなかったのではないか。この場合、祖型が多賀城や国分寺に「復興瓦」として供給されなかったことも説明が付く。東北地方では国府・国分寺と無関係の文様が郡レベルの寺院で採用されることが多く、宝相華文もそうした一例なのかもしれない。

しかし、ここで大きな問題になるのが新羅人の関与である。新羅人は陸奥国府の修理に従事したと史料に明確に記載されており、上述の見解と大きく矛盾する。残された課題は大きい。菜切谷廃寺の瓦の評価を進めることで、通説とは異なる可能性も見えてきたという所で、ご容赦いただきたい。

## 第2の視点 顎面型押し施文の系譜

※以下の内容は日本考古学協会第91回研究発表会にて発表する予定のため、概略のみ記す。

東北地方には統一新羅に見られるような顎面に型押し施文を施した軒平瓦がある。これらの瓦と新羅や北部九州との関わり、あるいは東北地方内での相互関係は未だ不明な点が多い。そこで、技術的な側面からの比較検討を進めている。

軒平瓦の製作（成形）技術は破断面の観察から行われることが多いが、当該瓦は断面の痕跡が不明瞭であった。そこでX線CTスキャンをすることで内部の空隙を可視化し、粘土塊の組み合い方を推測した。結果、菜切谷廃寺出土の瓦は東北地方で類例のない製作方法であり、北部九州や新羅とも異なることが分かった（図2）。

## おわりに ～新しい技術の使いどころ～

2つの“立体”的視点を整理しよう。1つ目は瓦当文様を2次元的な文様でなく、立体物として見る視点であった。これを最大限可能にするために3次元計測を行い、3次元データから断面を抽出し、傾斜量をマッピングした。これによって文様の立体視が可能になった。2つ目は瓦の内部構造を透かして見る視点であった。X線CTスキャンを行い、得られたデータから製作技術の復元を行うことができた。

さて、筆者が考える新しい技術の使いどころは2つある。卑近な言い方をすると①「見えていたものを他の人にも見えるようにする」。②「見えなかったものが見えるようにする」である。①は既知の事柄（例えば瓦当を立体的に見るとするのは瓦研究では当然のことだったと思う）であっても、新しい技術によって可視化や共有化を進めることが重要という意味である。②は未知の事柄を明らかにすることで、文字通り、研究の最前線を広げていくものである（X線CTスキャンはこちらであろう）。新しい技術はその新規性が注目されがちではあるが、使いどころを押さえて、意義のある応用例を増やしていくことが今後より重要になると思考している。

## 謝辞

東北大学考古学研究室、鹿納晴尚氏（東北大学学術資源研究公開センター総合学術博物館）

本研究は科研費「平安期地方社会における渡来系移住民の実態解明」（24K16193）、「日本古代中世移行期における地域間交流の考古学的研究」（22KJ2225）の助成を受けた。

## 引用・参考文献（論文等）

網伸也 2023「平安京官窯の様相からみた与兵衛沼瓦窯」『災害と境界の考古学』 pp.347-360

上原真人 2015『瓦・木器・寺院』 すいれん舎

亀田修一 1995「顎面施文軒平瓦に関する覚書」『近藤義郎古稀記念 考古文集』 pp.188-196

工藤雅樹 1965「陸奥国分寺出土の宝相花文鐙瓦の製作年代について」『歴史考古』13 pp.1-12

栗原和彦 1997「偏行忍冬唐草紋と宝相華紋」『九州歴史資料館研究論集』22 pp.79-98

- 栗原和彦 1999「大宰府出土の9・10世紀の平瓦」『瓦衣千年』 pp.447-457 真陽社  
 高正龍 2000「新羅古瓦についての覚書」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』6 pp.43-67  
 佐川正敏 2018「古代における東北の復興」『東日本大震災復興祈念特別展 東大寺と東北―復興を支えた人々の祈り』 pp.33-40  
 菅原祥夫 2015「古代会津の開発と渡来系集団」『韓式系土器研究』14 pp.305-314  
 菅原祥夫 2015「製鉄導入の背景と城柵・国府、近江」『考古学ジャーナル』669 pp.24-28 ニューサイエンス社  
 舘内魁生・小川淳一 2023「宮城県中屋敷前遺跡と出土瓦」『災害と境界の考古学』 pp.339-346  
 田中央生 2012『国際交易と古代日本』 吉川弘文館  
 内藤政恒瓦資料研究会 2013「宮城県を中心とする内藤政恒瓦資料(2)」『宮城考古学』15 pp.155-171  
 初鹿野博之・矢内雅之 2023「多賀城跡軒瓦編年第IV期の設定と新羅系の瓦」『災害と境界の考古学』 pp.311-320  
 藤木海 2024「陸奥国分寺の瓦生産体制と在地社会」『国分寺造営と在地社会』 pp.237-265 高志書院

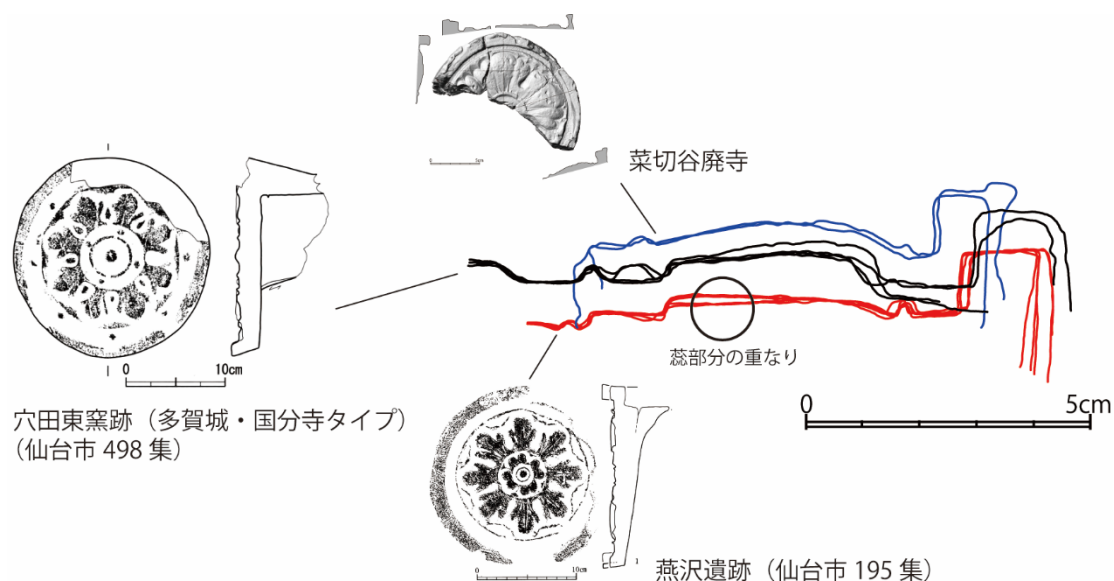


図1 宝相華文軒丸瓦の花弁断面の比較

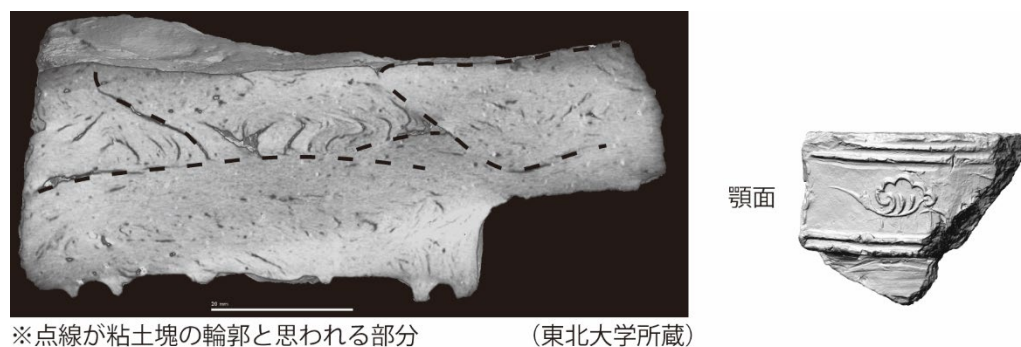


図2 菜切谷廃寺顎面型押し施文軒平瓦のX線CTスキャンによる断面図